

新しいジャーナリズムをつくる

市民が選ぶ、市民が贈る、
日本版ピューリッツァー賞

PCJF

Peace & Cooperative Journalist Fund of Japan

平和・協同ジャーナリスト基金



豊崎博光さん 第1回基金賞、フォトジャーナリスト

長年の取材成果が評価され感謝

世界の核被害の著書で基金賞をいただいた時、長年の取材の成果が評価されたことに、そして核被害が世界に広まっていることを知らせてくれたことに心から感謝しました。

いま日本や世界で起きているさまざまな問題は見えにくくなっています。その見えにくい問題取材し、調査を行っているジャーナリストは多数存在します。PCJFは、そうしたジャーナリストの仕事の評価し、見えにくい問題を社会に知らしめるという重要な役割を担っていると思います。



鎌田 實さん 「鎌田實がたずねる地域医療の先達 若月俊一・早川一光・増田進」で第5回奨励賞、諏訪中央病院名誉院長
神さまとヴ・ナロード

神さまに会いに行った。神社参りしたわけではない。地域医療の神さまだ。雪に閉ざされた岩手県沢内村の増田進や、京都の西陣で職人たちの在宅医療をはじめた早川一光を訪ねた。

もう一人の神さまは佐久総合病院の若月俊一。亡くなられて本当の神さまになった。

「住民の民主化ができなければ、医療の民主化はできない。」「ヴ・ナロードの精神がなければ本当の地域医療はできない。鎌田君、人民のなかへだよ。忘れないで。」若月先生の言葉、今も忘れていません。この賞をいただいたおかげで、忘れっぽい鎌田も忘れていません。「ヴ・ナロード」。



斉藤光政さん 第6回基金賞、東奥日報社編集委員

受賞をバネに米軍問題を追う

新聞記者なら誰でもあこがれる新聞協会賞。それがすぐそこに、手がとどきそうなところにあった。ところが…。在日米軍の核配備問題にメスを入れた自信作だった。それだけにショックは大きかった。「たかが賞じゃないか…。」開き直りというよりは、半ば「グレ」かけていた。そんな時だった。第6回平和・協同ジャーナリスト基金賞のお話が来たのは。すぐに、飛びついた。本当は欲しかったんですね、賞状が(笑)、そして「頑張ったね」の一言が。その時の喜びをバネに今も、日本列島の片隅でつとく米軍問題を追ってます。



鎌仲ひとみさん 第9回基金賞受賞の映画の監督、映像作家・東京工科大学准教授

果敢に働くジャーナリストの支援を

グローバル化、投機的貨幣経済、市場経済至上主義が席卷した時代が 破綻を始めたこの時代に、私たちのよりどころはどこにあるのだろうか？ 平和という言葉をお題目にしない、行動をともなった市民の存在が今ほど待たれている時はない。知るべきを知らないままに、多くの人々は 巨大なマスメディアの情報に翻弄され、間違った方向へと導かれているようです。私たちの未来を取り戻す。そのために、果敢に働くジャーナリストの支援をこれからもお願いします！



海南友子さん 「にがい涙の大地から」で第10回奨励賞、映像作家

作り手を励ます光

人々の小さな小さな思いが大きな志の賞となり、作り手を支え励ます光となっています。



西谷文和さん 第12回基金賞、フリージャーナリスト

「戦争の真実」を切り取る努力を続けたい

大学を卒業し市役所勤務を19年、その後「フリージャーナリスト」に転身しました。日本語にすると「無職」。しかし「無職」だからこそ、イラク訪問を継続できたのも事実。確実な年収を捨てて、「自由に使える時間」を手に入れたのですが、正直、生活できるか不安でした。

転身して1年、基金賞をいただきました。仲間から初めて「役所辞めてよかったなあ」という感想をもらいました。その後4回イラクを訪問。現場を踏めば踏むほど、「もっとしっかり仕事をしろ」という声が聞こえてきます。今後も「戦争の真実」を切り取って帰り、発表を続けたいと考えています。



吉永小百合さん 持続する志賞、俳優

戦争終結を祈りながら語り続ける

この度は皆さまのお手づくりの素晴らしい賞をいただき、大変嬉しゅうございます。心から御礼を申し上げます。20年間、原爆詩の朗読をしてきましたが、これからも若者や子供たちに語り続けていきたいと思っております。そして核兵器が廃絶される日を、心待ちしています。世界中の戦争の終結を祈りながら、自分に出来ることを、粘り強く続けていくつもりです。

(第12回基金賞贈呈式に寄せられたメッセージから)



水島宏明さん 「ネットカフェ難民」などで第12回と第13回で奨励賞、日本テレビ解説委員

地道でまっとうな活動に光を当てる顕彰に期待

地道でもまっとうな活動に光を当てる数少ない顕彰と感じています。私も2回賞をいただきましたが、注目されない時期に励まされました。平和と比べて協同の贈賞が少ないのは残念です。私が取材する貧困の分野では従来なかった社会的な連帯が生まれています。例えばマスコミがワーキングプアやネットカフェ難民、派遣労働等を頻繁に報道するのは「反貧困ネットワーク」の成果です。困窮者の支援に乗り出した弁護士団体、ヤミ金・サラ金問題に熱心なNPO、ホームレスなど困窮者支援に取り組むNPOなど、社会が評価すべき活動は広がっています。そうした活動にも目を向け評価してくれる貴重な存在としてますます発展されることを期待いたします。



古居みずえさん 第1回荒井なみ子賞、フォトジャーナリスト

受賞は大きな励みに

荒井なみ子賞の受賞は私にとってとても大きな励みとなりました。フリーのジャーナリストとして、長年、現地へ通い続け、パレスチナの人々の生活を撮り続けてきました。しかしときにはこのままでいいのだろうかと不安に襲われたり、自己過信をすることもありました。賞をいただき、やり続けてきてよかったと思いました。パレスチナの仕事は私のライフワークとなりつつあります。ますます仕事に励み、パレスチナの人々の生の声をお伝えしたいと思っています。



半田 滋さん 第13回基金賞、東京新聞編集委員

大賞で伝わった人々の声

代表運営委員の岩垂弘さんから「大賞です」との一報を受け、「自衛隊ものが評価されたんだ」といたく感心し、PCJFの懐の深さにじわじわ尊敬の念が広がった。

大賞に選ばれたのは自衛隊海外派遣のルポである。「必要最小限の実力装置」(政府答弁)として誕生しながら、いまや海外活動が本来任務の自衛隊。新たな経験を積み上げ、堂々たる“軍隊”に成長する一方、派遣後は知らぬ顔でいる政治家たちの不作為によって、自衛隊がさらに力をつけるというスパイラル現象を伝えたかった。名古屋高裁で違憲と断定されたイラク空輸活動など、知られざる活動を掘り起こすことができたという自負の一方で「ちょっとマニアックかなあ」と思っていただけに、「日本のピューリッツァー賞」ともいわれる大賞に選ばれたことは望外の喜びであった。「知られざる自衛隊」の姿を発信し続けるよう求める、人々の声だと思っている。

市民が選り贈る日本版ピューリッツァー賞 平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)に 参加しませんか。

世界は混迷の中にあります。このため人類が進むべき道が模索されていますが、私たちは「平和」と「協同」にこそ人類の未来がある、と考えます。

米ブッシュ政権が推進した「反テロ戦争」と新自由主義経済は、果てしない戦禍と百年に一度という経済危機と格差社会をもたらしました。やはり「平和」と「協同」こそが私たちの進むべき道であることが明らかになりました。「平和」と「協同」を礎とする社会を建設するためには、「平和」と「協同」を求める世論を高めることが不可欠です。

そこで、私たちは、反核・平和、人々の協同・連帯、人権擁護の推進に寄与した作品を発表したジャーナリスト、映像関係者らを顕彰し、支援するために平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)を1995年に設立しました。

基金は市民からの寄金で運営されています。

入会金、年会費はなく、1口 1000円以上(何口でも可)の寄付をお寄せくださった方を会員とさせていただいています。

毎年、基金から募金を訴えさせていただき、懐具合に応じてご寄付をちょうだいするという方式で活動しています。

会員は授賞にふさわしいと思う作品を推薦することができます。

また、基金賞贈呈式、講演会などに参加できるほか、年数回発行の「PCJFニュース」を読むことができます。

Peace & Cooperative Journalist Fund of Japan

■平和・協同ジャーナリスト基金事務局

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町 7-1 日本青年館内 日本青年団協議会気付

TEL・FAX 03-3475-2495 <http://www.pcjf.net/>

郵便振替口座 00110-8-651888 平和・協同ジャーナリスト基金(PCJF)

白井 厚 (慶應義塾大学名誉教授)



人類史的役割を担う基金

アジア太平洋戦争はなぜおこなわれたのか。それは当時の教育とマスコミによって国民が戦争を熱烈に支持したからです。教育とジャーナリズムは、そのことを猛省しなければなりません。今は幸い言論や表現はかなり自由になりましたが、戦争の実態を知らない国民が非常に多い。これも教育とジャーナリズムの責任です。戦争と平和の問題は、社会における人間関係と深く関連します。争いと格差を拡大する自由競争と市場経済に頼るだけでよいのか。差別や環境や高齢化や生活の質の問題等々を考えた時、「協同」の価値は極めて大きい。「平和・協同ジャーナリスト基金」は、大きく見れば人類史的な役割を担う基金だと言えましょう。

田畑光永 (ジャーナリスト)



基金が探すジャーナリストの仕事とは

このところ嘯みつくように迫ってくるニュースは、ひとつの時代の終わりを感じさせる。これまでわれわれを追い立ててきたものに別れを告げるときが来たのではないか。人間は本来もっとゆったりと仲良く日々を過ごすことが出来るはずだ。

紙に、電波に、パソコンに、無尽蔵にあふれる情報はそれぞれがなにかを伝えてくる。面白いこと、びっくりすること、嘆かわしいこと、悲しいこと、そして嬉しいこと……。その洪水の中にわれわれが取り戻したいと願うものを届けてくれるジャーナリストの仕事が確かにある。

平和・協同ジャーナリスト基金はそういう仕事を探す。

■代表委員

梓澤和幸 (弁護士)

色川大吉 (東京経済大名誉教授)

白井厚 (慶應義塾大名誉教授)

袖井林二郎 (法政大名誉教授)

竹本成徳 (元日本生活協同組合連合会会長)

田畑光永 (ジャーナリスト、元TBSキャスター)

中坊公平 (元日本弁護士連合会会長)

■運営委員

岩垂 弘 (代表)

浅川武男 / 芦澤礼子 / 岩瀬 弘

大村 仁 / 小田成光 / 加藤直子

河合 力 / 川田志津子 / 坂野直子

曾木博海 / 高橋秀子 / 高橋 宏

田尻孝二 / 田仲暁子 / 中尾ひろえ

中村易世 / 花城敏朗 / 塙喜一郎

丸滨江里子 / 森下一徹

平和・協同ジャーナリスト基金賞には、基金賞(大賞)、奨励賞、
荒井なみ子賞(元生協役員・元朗読劇団「八月座」座長の荒井なみ子さんからの寄金で創設された賞)、
特別賞などがあります。2008年までに116人・団体にこれらの賞を贈呈しました。

歴代の主な受賞者の氏名と作品・活動名

●基金賞(大賞)

- 第1回(1995) ● 豊崎博光氏(フォトジャーナリスト)「アトミック・エイジ」(築地書館)
● NHK長崎放送局とNHK福岡放送局共同制作「長崎 映像の証言——よみがえる115枚のネガ」
- 第2回(1996) ● 井上晴樹氏(編集者・作家)「旅順虐殺事件」(筑摩書房)
- 第3回(1997) ● SHANTI(フェリス女学院大学学生有志)「さだ子と千羽づる」(オーロラ自由アトリエ)
- 第4回(1998) ● 新井利男氏(フォトジャーナリスト)による「中国の日本人戦犯自筆書供述書」の入手
(「世界」、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、週刊金曜日ほか)
- 第5回(1999) ● 広河隆一氏(フォトジャーナリスト)写真記録「チェルノブイリ消えた458の村」(日本図書センター)
- 第6回(2000) ● 斉藤光政氏(東奥日報社社会部長)の米軍・三沢基地に関する連載記事「解かれた核の封印」
- 第7回(2001) ● 伊藤明彦氏(元放送記者)による被爆者の声収録と公的機関へのテープ寄贈活動
- 第8回(2002) ● 田中伸尚氏(ノンフィクション・ライター)「憲法を獲得する人びと」(岩波書店)など憲法に関する一連の著作
- 第9回(2003) ● グループ現代制作ドキュメンタリー映画「ヒバクシャ HIBAKUSHA——世界の終わりに」(鎌仲ひとみ監督)
- 第10回(2004) ● 高校生一人署名活動実行委員会、長崎新聞社編集局報道部
「高校生一人署名活動～高校生パワーが世界を変える」(長崎新聞社)
● 高知県ビキニ水爆実験被災調査団編「もうひとつのビキニ事件」(平和文化)
- 第11回(2005) ● 沖縄タイムス社と神奈川新聞社の共同企画「米軍再編を追う——安保の現場から」
● 毎日新聞社「特集『戦後60年の原点』シリーズ」
- 第12回(2006) ● 西谷文和氏(フリージャーナリスト)のイラクに関する報道活動
- 第13回(2007) ● 半田 滋氏(東京新聞編集委員)「新防人考・変ぼうする自衛隊」(東京新聞・中日新聞連載)
- 第14回(2008) ● 湯浅 誠氏(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長)「反貧困『すべり台社会』からの脱出」
(岩波新書)

●荒井なみ子賞

- 第1回(2006) ● 古居みずえさん(フォトジャーナリスト)監督の映画「ガーダ・パレスチナの詩」
- 第2回(2007) ● 山秋 真さん(ライター)「ためされた地方自治 原発の代理戦争にゆれた能登半島・珠洲市民の13年」(桂書房)
- 第3回(2008) ● 田浪亜央江さん(大学非常勤講師)「〈不在者〉たちのイスラエル」(インパクト出版会)

●特別賞

記憶の中のジャーナリスト賞(2003)

- 故・松井やよりさん(元朝日新聞編集委員)「愛と怒り 闘う勇氣」(岩波書店)

持続する志賞(2006)

- 吉永小百合さん(俳優)の20年間にわたる原爆詩朗読活動